

学位請求論文要旨

中国における留守児童共同体生態場構築の探求
—対話的問題提起学習を援用して—

2019年6月

城西国際大学大学院 人文科学研究科
比較文化専攻

周 亜芸

本研究は、過去において留守児童の一人であった者として、筆者自身、留守児童問題の解決に向けてどんなことができるのか、という問いの下に、対話的問題提起学習を援用して、中国の元留守児童・現留守児童が周（筆者）と対話を通じて、生態学的主体性を獲得すると同時に、その過程で留守児童共同体生態場の構築が進むことを実証的に示すことで、留守児童問題の解決方法の一つを提案することを目的とする。本研究は以下の 7 章から構成されている。

第 1 章序論では、まず、改革開放政策やグローバル化により、沿岸部の都市における急速な経済発展による労働力不足の中で、大勢の農民が都市に移動する事態が発生し、親が単身都市に出稼ぎに出た結果「留守児童」が大量に生み出された社会背景を述べた。次に、中国における留守児童研究を概観し、元留守児童と現留守児童それぞれが抱えている問題には異同が認められることから、本研究では元留守児童と現留守児童両者を分けて取り上げることを説明した。最後に、対話的問題提起学習に基づく対話を通じて、中国の元留守児童・現留守児童は、自分たちが置かれている現状を捉え返し、その現状を変えていく主体として自己を形成していくとともに、留守児童共同体生態場の構築の可能性を提示した。

続く第 2 章では、本研究の理論的枠組みとして言語生態学と対話的問題提起学習を提示した。言語生態学では、言語生態系・人間生態系・自然生態系が相互交渉的に形作られ、言語生態に不全がある場合、人間生態にもマイナスの影響を与えると捉えられている。従って、留守児童の人間生態を良い状態にするには、まず彼らの言語生態の保全が必要であると考えられる。その言語生態を保全する方法として、対話的問題提起学習を援用して、周と元留守児童・現留守児童が対話を通じて、自ら留守児童を生み出している根本的な社会構造を認識し、主体的にその社会構造を変えていくことこそが根本的な問題解決につながる可能性を提示した。

第 3 章では、中国の元留守児童・現留守児童の先行研究及び対話的問題提起学習の先行研究を概観した。中国の元留守児童・現留守児童の先行研究から、元留守児童は成人しても過去の留守児童経験を引きずることで、彼ら現在の人生及びキャリアに大きな負の影響を被っている一方で、現留守児童は外部から与えられた言説や「社会的支援」により、自分の主体性を発揮できず、受動的な存在に留まっていることが分かった。従って、元留守児童と現留守児童が社会を構成する主体として能動的に社会に働きかけることができるように、自分たちの留守児童経験を捉え直し、留守児童経験を新たに意味付けることが重要であると考えられる。また、対話的問題提起学習の先行研究から、対話を通じた参加者の認識の変容及び生態学的意味の生成は、参加者を取り巻く世界に対する新たな理解を得るだけでなく、それと同時に世界に対して能動的に働きかけていく実践につながることも分かった。しかしながら、研究者を対話参加者とする研究はそもそも少なく、さらに、その場合であっても、対

話参加者として研究者自身を分析する研究は管見の限りない。対話的問題提起学習は、対話を通じて対話参加者の双方が水平的関係に立ち、ともに学び合うことを重視する学習法である。従って、対話的問題提起学習を援用した対話を分析するとしたら、対話参加者の一方だけでなく、対話参加者双方の学びを見ることが重要な課題であると考えられる。従って、本研究は、対話的問題提起学習を援用して、周と対話を通じて、中国の元留守児童・現留守児童が自己を起点にして自己と自己を取り巻く世界とのつながりを捉え返すことで、自分たちで生き方を切り開いていき、能動的に社会変革に向けて働きかける主体となることがどのように達成されるかを追求することにする。

第4章の研究方法では、本研究の調査フィールド、調査協力者のプロフィール、対話的問題提起学習による調査手順及びデータ収集方法、分析方法について紹介した。

第5章（【研究1】）では、元留守児童の3人（静・彩・健）が周と対話的問題提起学習による対話を繰り返すことで、それぞれにおいて生態学的主体を成す契機がどのように形成されたか、自己と世界をつなぐを辿る社会的実践とはどのようなものかについて、元留守児童の言語生態場に注目して分析した。具体的には、まず、周が、静の出身地に老人と子どもだけが取り残されたような農村の実態を問題提起することによって、静は自分を取り巻く世界（出身地の村）に生きている全ての農民へと視野を拡張し、そして自分を取り巻く現実を捉え返すことで、留守児童問題は構造的に作られた社会問題であると認識し、自分もその繋がりの中の一人であることを捉え返した。その認識を踏まえて、静は留守児童当事者として主体的に留守児童問題の解決に向けて考え始めた。さらに、1年後に静は自己の生存を支える食糧の確保を他者の生存と関連づけて把握することによって、自己のあり方・関わり方を変えることへの意志（逆規定）が胚胎し、具体的な実践（野菜栽培）が行われた。彩は、周が、現在大学生である彩の身近に起きた「キャンパスローン事件」を取り上げることによって初めて自分と世界との繋がりを認識した。その認識を踏まえて、彩は「出稼ぎ農民の増加」という現実を起点にして、能動的に自己及び自己にとって身近な群像の生存の危機（離婚率の上昇、生きる意味の喪失など）を辿り、そしてすべてのことが繋がっていることを認識した。最後に、彩は自分の留守児童経験を文字化してテキストを作成し、それをもとに周と議論することにより、自分も留守児童であったことを認識し、留守児童当事者として主体的に現実世界に向けて働きかけようとする意志が形成されたことが窺われた。健は、周の話題提起によって過去の農民の生活に目を向けるようになり、自分を取り巻く現実（出稼ぎ農民、農業の衰退、飢餓リスク、中国経済への悪影響）の繋がりを辿り、そして自己（主体）と他者・現実世界（客体）との相即的關係の把握を能動的に進めた。その認識を踏まえて、健は、自分を取り巻く世界（農村、都市）のコト・モノ・人を能動的に捉え返し、そしてその世界のあり方及びリスクをよく認識し

た上で自分の未来像を見出した。

第6章（【研究2】）では、現留守児童の3人（宏・武・玲）が周と対話的問題提起学習による対話を繰り返すことで、生態学的主体を成す契機がどのように形成されたか、自己と世界のつながりを辿る社会的実践とはどのようなものかについて、現留守児童の言語生態場に注目して分析した。具体的には、まず、宏は、周と対話を4回繰り返しながら現在の留守児童経験を捉え返したが、自分が直面している問題（両親の出稼ぎ、農民の出稼ぎ）を所与の事実として認識し、自己と現実世界との繋がりを認識していなかった。また、周との対話を通じて、宏は「出稼ぎ」の内包するリスクを認識し、そのリスクから逃れる選択肢として「自給自足」という新たな未来像を見出したが、それは自己を起点にした自己を取り巻く世界のコト・モノ・人の把握の下に見出したものではなかった。さらに、宏と周の対話はほとんど周が一方的に問題提起しながら対話を進める形になっており、宏は現在でも幼少期の過去の留守児童経験に囚われて自ら積極的に話すことがなく、結果として言葉が十分に機能しておらず、狭い範囲で世界観、行動基準観、人間関係観、自己のアイデンティティ観を捉えていることが窺われた。武は、周の留守児童経験を辿ることをきっかけにして、自分の留守児童経験（「一人っ子政策」による罰金・家壊し、「男尊女卑」、父親の給料不払い）を捉え返し、自己（主体）と現実世界（客体）の繋がりを認識した。また、周の問題提起により、武は自分の父親をはじめとする建設労働者の給料不払いについて捉え返し、自分の既有知識を生かしてその問題の解決策を見出し、生態学的主体性の形成をうながす契機が形成された。しかし、その認識は次の対話へと繋がることがなく、武の生態学的意味の生成過程は行きつ戻りつしていることが分かった。玲は、将来の生き方（ネットショップの運営）という話題をきっかけにして、ネットショップの普及による一連の問題及び農業の衰退による影響を捉え返した。外的言語生態場における周の一連の働きかけによって、玲は、自己を起点にして自分の生存の危機と他者・世界との繋がりを認識し、農業の重要性に気づき、「農業→役に立つこと」というように捉え直した。

第7章では、まず、周の生態学的意味の生成の過程を見た。本研究の実践者でありながら対話の参加者として対話的問題提起学習を援用して、元留守児童・現留守児童と対話を繰り返す中で進んだ周の生態学的意味の生成過程とはどのようなものか、生態学的主体を成す契機がどのように形成されたか、周の内外の言語生態場と実践生態場に注目して分析した。周が外的言語による議論を踏まえて対話的問題提起学習による対話のテキストを作成するという言語行為が引き金になって、自分が留守児童であったことを認識した。また、周が元留守児童の静と対話を積み重ねることにより、留守児童問題を繋がりの中にある問題とし

て捉え返した。さらに、その認識を踏まえて、言語生態学と向き合った時、周は主体的に「世界は10億の人が生存危機（飢餓人口）にある」に着目し、それを静との対話を通して到達した認識「出稼ぎ農民の増加による農業の衰退」と関連づけて捉えようとした。このような認識を踏まえ、周は、自己を起点にして、「世界は10億の人が生存危機（飢餓人口）にある」を不可避とする繋がり of 不全を変えようとする試みとして、わずかでも自身が食糧生産に携わること、即ちベランダでの野菜栽培を始めた。さらに、周は元留守児童の静と野菜栽培経験を共有することにより、自然生態系・人間生態系・言語生態系という相互交渉的關係が形成され、三極構造が実現された。

続いて、第5章、第6章と第7章の周の生態学的意味の生成過程の分析結果を踏まえて、「言語生態のあり方の良さは人間生態のあり方の良さ」、「外的言語生態場と内的言語生態場の相互交渉による言語生態の保全」、「生態学的思考によるつながりの改善」の3点から考察を行った。さらに、「対話のテキスト」、「対話の回数」、「対話の参加者」の3点から対話的問題提起学習による中国の留守児童共同体生態場構築を目指す自他支援システムへの示唆を述べた。研究の意義としては、「同行者としての研究者の可能性」、「対話的問題提起学習による双方向の学習」、「学習者共同体構築の可能性」、「当事者による当事者のための当事者研究」、「言語教育学から社会学への貢献の可能性」の5つが挙げられる。今後の課題として、(1)留守児童を取り巻く関係者との対話の必要性、(2)元留守児童・現留守児童と継続的に対話を行う必要性、(3)非留守児童と元留守児童・現留守児童との対話の意義の明確化という課題が残されている。